

〔法学新報〕第28卷3(317)号 大正7年3月1日

○中央大学実業講話会 例年の如く我中央大学学友会学芸部に属する実業講話会は去月十七日(日曜日) 本学第七号講堂に於て開催したり此日天晴れ風和き前日の北風濛濛と紅塵を吹き散らせしとは大差ありて実に好都合なりき定刻午後三時先づ商科学生諸君の著席し次て先輩実業家来賓諸氏の臨席せらるるや拍手喝采の裡に委員登壇して開会の辞を述べ斯くして本会新任會長岡野博士の來臨を暫く待ち居たるも都合上御出席なき為め馬場理事より懇篤なる講話あり終りて時間の都合上直に副會長久米良作、田中文藏並に武田明其他の諸氏より寄附せられたる余興に移る先づ田邊南龍の柳生又十郎の講談あり快舌滔滔正に一時間半に及ふ次に浪花節三升家一九の藪居と大久保と云ふ演題にて語り出つる所滑稽諧謔、節面白くして敢て笑を禁するに術なく暫時休憩の後俄に起る拍手に擁せられて久米副會長は一場の講話を試みられ実業社会に立たんとする学生諸君は宜しく算筆の熟練を必要とする旨を訓戒せらる時正に六時なれば直に立

食の幕は開かれ余興は更に引続き満留の薩摩琵琶小敦下段あり
彼れ一度吟すれは其妙音に伴ふて梁上の塵も為めに舞出つへく
其清指一度弾すれは石積の飛泉鑿鑿として巖を穿つかと疑はし
むるはかりなり此間來会先輩諸氏は互に胸襟を披きて過去の経
験談に移り後進の爲め有益なる御高説を拜聴す又其間学生余興
として都山流琴古流尺八の合奏ありて時の過くるを知らず其興
漸く尽きんとする頃佐藤幹事は起立せられて学生一同に対し今
日久米副会長よりの御訓示は余も極めて同感なれば克く服膺せ
られんことを希望する旨を述べられそれより一同本会の万歳を
三唱し目出度く閉会したり擱筆に際して当日は先輩諸氏か御多
忙中にも拘はらず多数臨席せられたるは感激に堪えざる所な
り（委員報）